

住民自治組織の形成～祭に関わる活動に着目して～

東日本大震災・原子力災害 伝承館 常任研究員 葛西 優香

本研究では、福島県双葉郡において、東日本大震災と原子力災害からの復興過程で、離れ離れになった住民が再び集い活動を行うきっかけを明らかにし、集合状態から集団として住民自治組織化する過程に視点を置いた。

調査の中で見えてきたことは、神楽や民俗芸能、盆踊りなどを通じて、地元住民や震災後に新たに移住してきた住民が、集まった状態から集団へと変化し、組織を形成し始め、継承するために創意工夫しながら活動を継続している姿である。活動を行う背景にある住民心理に着目して調査を続けている。

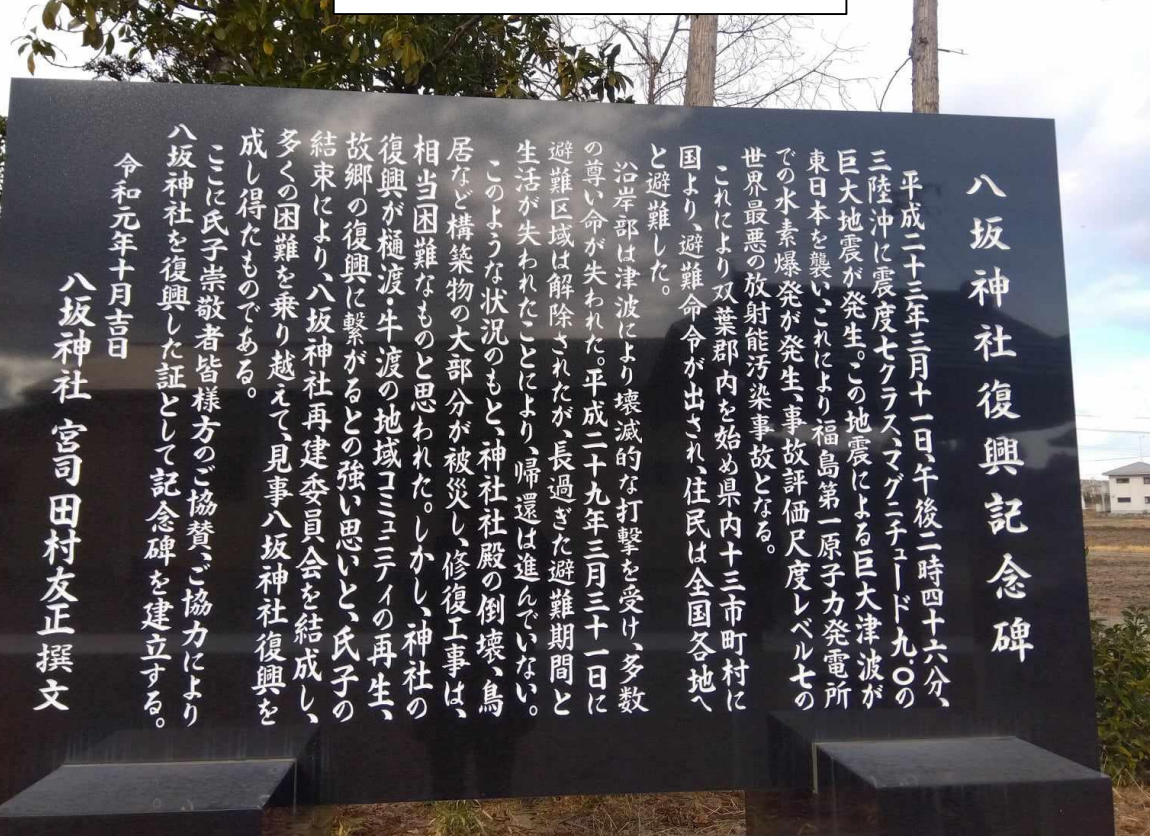
住民自ら立ち上がった神社再建委員会

震災による倒壊



浪江町は、一部地域避難指示解除以降、6年が経過し、帰還した住民や震災後に住み始めた住民の生活から多様な集まりが生まれている。中でも避難指示解除前の2015年から、神社再建委員会の活動は動き出していた。倒壊した神社の姿と心理が連動し、「生きる上での軸を失ったような気がした」と住民は語る。住民は、自ら立ち上がり、再起のきっかけとして村社の立て直しを行った。

再建



神楽・田植踊り・盆踊りの再興

神楽



田植踊り



盆踊り



神社が再建されれば、震災前から奉納を続けてきた神楽の練習が行われ、芸能保存会の活動が再興された。また、一年の五穀豊穡を願う田植踊り、そして年に一度、集落の住民が集まり音頭に合わせて共に舞う盆踊りが2022年7月に再興した。居住地が離れた住民、新しく住み始めた住民が神社という一つの場所に集まってきている集合状態が再興1年目の盆踊り会場である神社では見られた。

各町において住民が模索しながら進める継承活動

大熊



双葉



浪江



町に戻り、生活をしている住民、避難先から通いながら活動に参加する住民、新しく震災後に居住を始めた移住者と多様な背景を抱える住民が集合し、盆踊りを舞う。再興2年目の盆踊りでは、1年かけて住民自治活動により練習を重ね、神楽や田植踊り、盆踊りの音や技の継承が行われ始めている。かつてあった芸能保存会という組織は、集落で生まれた住民のみが所属していたが、構成員や守られてきた規範を変化させつつ、いかに町の文化を守り続けるか、各町で模索しながら活動が行われている。守られてきた歴史の中にある文化の再現は、すぐには成立しないことを住民は認識し始めている。

集合状態

→ 集合体

→ 集団

住民自治組織の形成がなぜ神社の再起から始まり、祭の中で行われる神楽や田植踊り、盆踊りにある技の継承の中で行われているのか。祭の中には、地域で営まれてきた記憶があり、新旧住民が記憶の中にある文化を残すことに一つになる欲望が生まれ、一体感を味わう状況は、そう簡単に成し得ない。難しさを感じながら、その境地を目指し始めているのである。

参考文献：村本由紀子：集団と集合状態との曖昧な境界：早朝の公園で見出される多様なアイデンティティ，社会心理学研究，第12巻第2号，pp113-124，日本社会心理学会，1996 他